

「～トカ～トカ」文成立における「Aトカナンドゾ」
「AトカB（ナド）トコソ」文の意義

On the worth of “A tocanando” and “A toka B (nado) tokoso”
sentences in the formation of “...toka...toka” sentences

姫 宇 恒

Ji, Yuheng

「～トカ～トカ」文成立における 「Aトカナンドゾ」「AトカB（ナド）トコソ」文の意義

姫 宇 恒*

1. はじめに

「トカ」について、次のような文がある。

①Aトカ

このタイプの文は「トカ」が一つしかない。その例として、(1)が挙げられる。(1)について、岩田(2014)では、「話者自身が直接ははっきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがあるといった不確定的な意味」と説明し、このような例を「伝聞」用法と命名している。

- (1) いとあやしき梵字とかいふやうなる跡にはべめれど、御覧じとどむべきふしもやまじりは
べるとてなむ。
(源氏物語・若菜)

②Aトカナンドゾ

- (2) 里吏に對スルソ陳餘一起アガツテウチカヘサウトカナントソセウトスルソ張耳カフミツケ
テウタセタソ
(史記抄・卷十一)

③AトカBトコソ

- (3) 下京にてなといふ人のによにんの参りにてと申もあへぬに、長老はを出し、上臈とか女
房とこそ申へけれ、によにといふ事やあると大にしかられ、
(嘶本大系・第二卷 醒睡笑(一) 鈍副子)

④AトカBナドトコソ

- (4) さても此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにハしさいこそ候
ハめ、ふしんしごくに存候、そも／＼かゆといふ物ハ、水の中へこめをいれ、しるくやわ
らかににたるをかゆといふなれハ、あるひハさんずいにこめとか、じきへんにゆなど、こ
そかくべきものにて侍るなるに、
(嘶本大系・第三卷 一休閑東咄(下))

⑤AトカBトカ

- (5) 扱々むさとしたやつの。伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。
(大藏虎寛本狂言・素袍落)

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

⑥Aトカ何トカ

(6) 要するに嫉妬とか何とかいふやうな事は、冷酷に考へてみれば、随分馬鹿げたものなので
せう。 (女学世界・偽はらざる告白 紫陽花 1909)

用例を採取する際、以下の資料を利用した。

上代…万葉集 (『新編日本古典文学全集』小学館)

中古…源氏物語 (『新編日本古典文学全集』小学館)

中世…宇治拾遺物語 (『新編日本古典文学全集』小学館)、平家物語 (『日本古典文学大系』岩波書店)、史記抄 (『抄物資料集成』清文堂)、蒙求抄 (『抄物大系』勉誠社)、醒睡笑 (『日本古典文学大系』岩波書店本文データベースによる)、天草版平家物語 (中納言・日本語歴史コーパスによる)、天草版伊曾保物語 (中納言・日本語歴史コーパスによる)、大蔵虎明本狂言 (中納言・日本語歴史コーパスによる)

近世…大蔵虎寛本狂言 (『能狂言：大蔵虎寛本』岩波書店)

[『日本古典文学大系』岩波書店] 一休閑東咄、宇喜蔵主古今咄揃、初音草咄大鑑、咲顔福の門、笑の初り、百生瓢、落嘶年中行事、落嘶千里藪、梅屋集

[『洒落本大成』(中納言・日本語歴史コーパスによる) 南閨雑話、深川新話、総籬、阿蘭陀鏡、誰が面影、粋の曙、箱まくら、花街鑑、花街寿々女

[人情本] 春色梅児誉美 (『日本古典文学大系』岩波書店)

現代…明六雑誌、女学雑誌、女学世界、婦人倶楽部 (中納言・日本語歴史コーパスによる)

①～⑥の文の用例数を整理すると表1になる。用例の取り方について、(7)のような「トカヤ」の例を除外した。「トカヤ」について、小田(2015)は「複合辞「とかや」(「か」は係助詞、「や」は間投助詞)は不確実な伝聞を表すが、やがて副助詞的に用いられた。」と述べている。従って、「トカヤ」全体を一語として見ることができる。「トカ」とは異なる形式である。「トカヤ」については機会を改めて考察したい。

(7) その後、左京の大夫の家にもえ行かずなりにけるとかや。

(宇治拾遺物語・巻第二・五)

表1から見ると、上代、中古において、「トカ」が一つの「Aトカ」の形式しか見られない。中世末期に、「～トカナンドゾ」形式の文が初めて見られる。その後、「～トカ～トコソ」「～トカ～ナドトコソ」のように「トコソ」と共起する文が出現する。近世前期になると、「～トカナンドゾ」「～トカ～トコソ」「～トカ～ナドトコソ」文は衰退する。

「～トカ～トカ」の選言用法(後述)が初めて見られるのは、「～トカナンドゾ」文が出現した後である。「～トカ～トカ」の例示用法(後述)が初めて見られるのは、「～トカ～(ナド)トコソ」

の後である。

以上のことから分かるように、「～トカ～トカ」の選言用法が成立する少し前の段階で、「～トカナンドゾ」文が見られる。そして、「～トカ～トカ」の例示用法が出現する前に、「～トカ～（ナド）トコソ」文は出現した。「～トカナンドゾ」「～トカ～（ナド）トコソ」文は一時的出現した。

表1 各時期における「トカ」の用例数

用例数 出典	文型	Aトカ	Aトカ ナンドゾ	Aトカ Bトコソ	Aトカ Bナドトコソ	Aトカ Bトカ	Aトカ 何トカ
万葉集 (759)		37	0	0	0	0	0
源氏物語 (1010)		54	0	0	0	0	0
宇治拾遺物語 (1220)		27	0	0	0	0	0
平家物語 (鎌倉)		11	0	0	0	0	0
史記抄 (1477)		2	1	0	0	0	0
蒙求抄 (室町末)		0	0	0	0	1	0
醒睡笑 (室町末)		14	0	1	0	0	0
天草版平家物語 (1592)		5	0	0	0	0	0
天草版伊曾保物語 (1593)		1	0	0	0	0	0
大蔵虎明本狂言 (室町末)		3	0	0	0	0	0
大蔵虎寛本狂言 (江戸初)		4	0	0	0	2	0
一休閑東咄 (1672)		1	0	0	2	0	0
宇喜蔵主古今咄揃 (1678)		2	0	0	0	1	0
初音草嘶大鑑 (1698)		0	0	0	0	1	0
咲顔福の門 (1732)		0	0	0	0	1	0
南閨雑話 (1773)		3	0	0	0	0	0
深川新話 (1779)		1	0	0	0	0	1
総籬 (1787)		4	0	0	0	0	0
笑の初り (1792)		0	0	0	0	1	0
阿蘭陀鏡 (1798)		1	0	0	0	0	1
誰が面影 (1812)		1	0	0	0	0	0
百生瓢 (1813)		0	0	0	0	1	0
粋の曙 (1820)		0	0	0	0	0	1
箱まくら (1822)		1	0	0	0	0	0
花街鑑 (1822)		1	0	0	0	1	0
花街寿々女 (1826)		2	0	0	0	0	0
春色梅児誉美 (1832～1833)		10	0	0	0	4	0
落嘶年中行事 (1836)		0	0	0	0	1	0
落嘶千里藪 (1841)		0	0	0	0	1	0
梅屋集 (1865)		0	0	0	0	1	0
明六雑誌 (1874～1875)		4	0	0	0	12	0
女学雑誌 (1894～1895)		16	0	0	0	15	0
女学世界 (1909)		121	0	0	0	114	16
婦人倶楽部 (1925)		66	0	0	0	45	6

2. 先行研究

2-1 此島 (1966)

此島 (1966) では、「トカ」を「カ」の一部として記述している。

此島は (8) (9) のように、引用の「ト」の下に「カ」の添う用法があると述べている。そして、(10) のように、「トカ」が一語化して、下の「言う」のような動詞なしに並立に用いられるようになったとされている。

(8) 宇賀龍とか土蜘蛛とかいふものゝ押出し。 (浮世風呂・四下)

(9) 霊トカ属トカセヨトアルホドニ…… (蒙求抄・十)

(10) 酵素を主体とする生化学的連鎖反応であるとする、当然酵素の生成とか色々の形質との相関とかが考えられ…… (『現代語の助詞・助動詞』一一九ページ)

此島は以上のように「カ」と「トカ」の関係を記述したが、本稿では、他形式も参照しながらより具体的に考察したい。

2-2 岩田 (2014)

岩田 (2014) では、「トカ」の史的変遷について、上代から現代の用例を調査し、その変遷過程を記述した。岩田によると、8世紀頃から、「トカ」は疑問 (係り結び) として使用されていた (= (11))。その後遅くとも11世紀までには伝聞の用法が成立した (= (12))。15世紀頃から助詞「カ」の影響をうけて、「トカ」は選言用法が見られるようになる (= (13))。選言用法というのは、衣畑・岩田 (2010) によれば、「今日は弁当を買うか、食堂に行くか。」のような二者択一を要求する用法のことである。その後18世紀後半から19世紀にかけて選言用法からの派生として例示が発生する (= (14)) とした。

(11) 海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫 (万葉 3.252)

(12) いとあやしき、梵字とかいふやうなる跡に侍めれど、 (源氏 3.296)

(13) 霊トカ属トカセヨトアルホドニ (蒙求 10.9 ウ)

(14) 今日帰ると造作とか戸棚とかを買って仕舞ますヨ (春色梅児誉美 100)

以上のことから分かるように、「～トカ～トカ」の成立に関して、従来の研究は「カ」の影響を受けて、「～トカ～トカ」が発生したとされている。「～トカナンドゾ」「～トカ～トコソ」「～トカ～ナドトコソ」文との関わりは触れていない。本稿はこれについて考察する。

¹ (8) ～ (10) の用例は此島 (1966) による。

² (11) ～ (14) の用例は岩田 (2014) による。

3. 「～トカナンドゾ」文について

中世末期において、(15) のように、「～トカナンドゾ」文が初めて見られるようになる。

- (15) 里吏に對スルソ陳餘一起アガツテウチカヘサウトカナントソセウトスルソ張耳カフミツケ
テウタセタン (史記抄・卷十一)

(15) は、里吏に打たれて倒れた陳餘が起きて反撃しようとしている。里吏を打ったら殺されることになる。張耳が陳餘を守るために、陳餘を踏んで抑えるという場面である。

「ナンド」の用法について、『日本国語大辞典』（第2版）によると、「引用文を受けて、おおよそのところを示す」という意味用法がある。以下その具体例。

- (16) 蜻蛉日記〔974頃〕上・康保五年『『またるものは』なんどうち笑ひて』

- (17) 宇津保物語〔970～999頃〕藤原の君『『ひとしく通ひ給はむなむ、よかるべき』なむど宣て』

- (18) 史記抄〔1477〕一二・屈賈「趙無咎が楚辞をよくするなんととてほめたぞ」

従って、(18) は「起アガツテウチカヘサウ（トカ）」が引用句で「ナンド」がそれを受けて、おおよそのところを示す意味と思われる。

前述したように、用例（1）は「伝聞」用法であるが、「話者自身が直接はつきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがある」といった命題目当てのモダリティである。一方（15）は、陳餘が「ウチカヘサウ」としたとははつきりとは確定できないが、それに類する行動をしたということであり、引用句内部が不確定だということである。

4. 「AトカB（ナド）トコソ」文について

4-1 「AトカBトコソ」文

「AトカBトコソ」文は次の（19）が挙げられる。

- (19) 下京にてなといふ人のによにんの参りにてと申もあへぬに、長老はを出し、上臈とか女房とこそ申へけれ、によにんといふ事やあると大にしかられ、

(嘶本大系・第二卷 醒睡笑（一）鈍副子）

(19) では、長老は女人に対して、「上臈」、あるいは「女房」とこそ申しあげるべきではあっても、女人と言う事があるだろうか（いや、ない）と述べている。

『日本国語大辞典』（第2版）によると、「上臈女房」という「身分の高い女官」の意味を表す表現がある。具体例は以下の通り。

- (20) 満佐須計装束抄〔1184〕三「上らう女ばうの色を聴（ゆ）るといふは、青色赤色の織物の唐衣、地摺の裳をきるなり」

³ (16) ～ (18) の用例は『日本国語大辞典』（第2版）による。

⁴ (20) ～ (22) の用例は『日本国語大辞典』（第2版）による。

(21) 平家物語〔13C前〕六・廻文「上臈女房達あまた選ばれて参られけり。公卿殿上人おほく
供奉して、ひとへに女御参りの如くにてぞ有りける」

(22) 太平記〔14C後〕一一・越中守護自害事「兵庫助貞持が女房は、此の四五日前に、京より
迎へたりける上臈（ラウ）女房にてぞ有りける」

(21) において、「上臈女房達」とあり、「上臈女房」が一まとまりで、それに「達」がついている。
即ち、「上臈女房」で一まとまりであり、全体が「身分の高い女官」を表す。

以上のことから、(19) は、「身分の高い女官」という一つの意味を「上臈トカ」「女房トコソ」
のように二つの代表で示していることになる。全集合「身分の高い女官」に対して、「上臈」「女房」
二つで示すという構文と考えられる。

(19) を意味的に考えると、「長老は女人に対して、上臈、あるいは女房とこそ申しあげるべきで
はあっても、女人と言う事があるだろうか（いや、ない）と述べている」という意味である。即ち、
一つの意味集合を二つの語で示し、上臈か女房かという二者択一の選択を示している。二者択一の
選択を示しているだが、その二者と「女人」とが対比されている。この例からは「その他」がある
とは言えようと思う。図示すると、以下のようになる。

（身分の高い女性 の呼び名の集合） 上臈（女房）	女人
--------------------------------	----

4-2 「AトカBナドトコソ」文について

「AトカBトコソ」文と同じ、(23) (24) のように、「トコソ」と共起する文「AトカBナドトコ
ソ」も見られる。

(23) さても此かゆといふ文字を、りやうわきに弓をかいて、中にこめをかくにハしさいこそ候
はめ、ふしんしごくに存候、そも／＼かゆといふ物ハ、水の中へこめをいれ、しるくやわ
らかににたるをかゆといふなれハ、あるひハさんずいにこめとか、じきへんにゆなど、こ
そかくべきものにて侍るなるに、（嘶本大系・第三卷 一休関東咄（下））

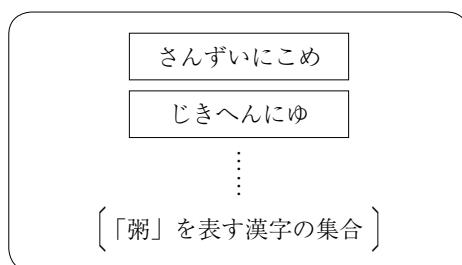
(24) さればとよ、これにつきて又ふしんこそ候へ、只今のごとく笑といふ字を竹かふりにいぬ

⁵ 「上臈とか女房とこそ申へけれ」の文を分析する際、まず「AトカBト」の文を確認する必要があると考えられる。「1.はじめに」で示した調査した範囲で「脚氣あるものが水泳ぎの最中に急に死ぬと河童に襲はれたとか蛇が尻から這入つたと言つた。（婦人倶楽部・恐るべき脚氣を治すには 遠山椿吉1925）」のような「AトカBト」の形式の文が見られるようになるのは明治以降である。従って、中世末期に見られる文「上臈とか女房とこそ申へけれ」は「上臈トカ」「女房トコソ」の形式と考えられる。

をかくこそ心ゑね、わらふといふ文字ならば、口へんにひろがるとか、目へんにしわむなど、
こそかくへき物にて侍るに、 (嘶本大系・第三卷 一休閑東咄 (下))

(23) では、「粥」という文字を「りやうわきに弓をかいて、中にこめをかく」のではなく、水の中に米を入れて煮てお粥を作るのだから、「さんずいにこめ」「じきへん (食偏) にゆ」のような書き方にすべきという笑い話なのである。(24) では、「笑」という文字を「竹かふりにいぬをかく」のではなく、「口へんにひろがる」「目へんにしわむ」のような書き方にすべきという笑い話なのである。この2例は「粥」「笑」という漢字を、粥の作り方、笑う動作に基づいて、存在しない漢字を勝手に述べるという笑話である。

これらの場合、「さんずいにこめ」「じきへんにゆ」「などとこそ」とあるので、「さんずいにこめ」「じきへんにゆ」以外にも作ろうと思えば、動作に基づき、勝手に漢字を作ることができるのである。図示すると、以下ようになる。ここに至って「さんずいにこめ」「じきへんにゆ」というのがその他の要素もある中の二つの「例示」だということが分かる。「～トカ～トカ」以前にこのような例示用法があったと考えられる。



5. 「～トカ～トカ」文について

5-1 選言用法

「～トカナンドゾ」文が出現した後「～トカ～トカ」の構文が見られるようになる。中世末期から近世初期の用例は(25)～(27)である。岩田(2014)によると、「～トカ～トカ」の発生初期では「選言用法」で用いられている。

(25) 我死ナバ。ワルキ。ヨクリ名デ。アラウズ。霊ト諡スルカ。又厲ト諡ヲスルカ。セヨト云ソ。
霊モ厲モ悪キ諡ソ。好イ諡ヲセイト。云ハイテ。悪キ諡ヲ。セヨト。イワレタカ。共デヨ
イトテ。共主ト子囊ガ。ハカラウテ。諡ンタソ。コ、デ。大夫ハ君命テ。霊トカ。厲トカ。
セヨト。アルホドニ。 (蒙求抄・卷十)

(26) 扱々むさとしたやつ。伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。(大蔵虎寛本狂言・素袍落)

(27) 是はいかな事。伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。(大蔵虎寛本狂言・素袍落)

(25) について、前の文「霊ト諡スルカ。又厲ト諡ヲスルカ。セヨト云ソ。」は諡号の「霊」と「厲」

の二つの要素を提示したので、「霊トカ。厲トカ。セヨト。アルホドニ。」の場合は前の発話を受けて全集合「霊」と「厲」を挙げている。

(26) (27) において、「伯父御は伊勢へ行ふとか、行まいとか。」は「伯父は伊勢へ行くというか、行くまいというか」の意味である。伯父と一緒に伊勢参宮に立つかどうかということを主人が太郎冠者に聞く場面である。後続の動詞「言う」が省略されたと考えられる。明日伯父の取る行動は「行行ふ」「行くまい」の二つの可能性しかないので、全集合「明日伯父の取る行動」を二つの要素「行行ふ」「行くまい」で表している。しかもこの二つは二者択一（選言）用法なのである。

5-2 例示用法

近世になると、「～トカ～トカ」の用例がだんだん多く見られるようになる。用例を観察すると、(28)のように、上接部は中世末期のような二項対立的な特徴がない用例、即ち例示用法が多く見られる。

(28) か、さんもわつちも、こんなに留メばのしきせ羽織一枚づゝきて、ほんにおめへのやうな役者とかはくしやとかいふ御きようなおかたにつれそへバ、寒くてならねへ。

（噺本大系・第十五巻 百生瓢）

(28) では、後続の「御きようなおかた」があるから、「役者」「はくしや」は「御きようなおかた」の具体例と考えられる。即ち、「御きようなおかた」という全体の集合がある。「役者」と「はくしや」はその集合の中の二つの要素である。この例は「～トカ～トカ」の「例示用法」の初出と考えられる。そして、(28) より (23) (24) の例が先行しているということが注目されるのである。

以上のことから、例示用法の発生について、4-1で述べたように、「上臈とか女房とこそ」は選言（二者択一）用法であるが、その二者と「女人」とが対比されていた。次に4-2で述べたように「AトカBナドトコソ」で「例示用法」の出現を見た。「AトカBトカ」が選言から例示へ展開するにあたり、それより先行して出現する4-1、4-2で述べた「AトカB（ナド）トコソ」が大きな意味を持っていることが分かる。

6. おわりに

本稿は各時期の用例を調査し、「～トカ～トカ」文の成立に関して、「Aトカナンドゾ」「AトカB（ナド）トコソ」文の意義を記述した。その結論をまとめると、次のようなものになる。

中世末期になり、「Aトカナンドゾ」という文が出現する。Aの部分の不確定的である。これはそれまでの「Aトカ」の伝聞用法と異なって、引用句内部が不確定だということである。

次に、中世末期から近世初期にかけて、「AトカBトコソ」「AトカBナドトコソ」文が一時的に出現した。「AトカBトコソ」文では、4-1で述べたように、他の要素と対比する意味用法がある。こうした意味の展開の影響を受けて、4-2で述べたように「AトカBナドトコソ」で「例示用法」

が出現したと考えられる。即ち、「Aトカ…命題目当てのモダリティとしての「不確定」」、「Aトカナンドゾ…命題内容自体の不確定」、「AトカBトコソ…命題内部の二者択一とそれ以外の対立」、「AトカBナドトコソ…命題内部の例示」というように何が不確定要素なのかという部分に推移があったと考えられる。

「AトカBトカ」文における例示用法が見られる前、「AトカBトコソ」「AトカBナドトコソ」文が先行して出現したことから、こうした意味の展開が「AトカBトカ」文における例示用法の発生に影響を与えたと考えられる。

<参考文献>

- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描—』 桜楓社
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1995) 「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐる—」、『複文の研究 (上)』 仁田義雄 (編) くろしお出版
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置のカの歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』 6 (4) 日本語学会
- 岩田美穂 (2014) 「例示並列形式としてのトカの史的変遷」『日本語複文構文の研究』 ひつじ書房
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』 ひつじ書房
- 小田 勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院

<使用データベース・コーパス>

- 国文学研究資料館, 嚟本大系本文データベース, <http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>, (参照2019-06-01)
- 国立国語研究所, 中納言・日本語歴史コーパス, <https://chunagon.ninjal.ac.jp>, (参照2019-06-01)

